

佳作

娘と絵本と隙間時間

畠山 菜穂子

柳田先生、今年は雨が多い夏でしたが、お変わり
りはございませんでしたでしょうか。昨年は、ペ
ージをかじりながら絵本と触れ合い始めた娘のブ
ックスタートの様子をお手紙しました。娘は二歳

半になり、今ではお気に入りの絵本の絵に合わせ、
自分なりのお話を読んでくれたりします。私は仕
事に復帰し、娘は多くの時間を保育園で過ごすよ
うになりました。保育園から娘と家に帰ると、食
事の支度、夕食、お風呂などに追われ、気が付く
と寝かしつけの時間になってしまいます。週末も、
溜まった家事を優先してしまい、娘とゆっくり向

き合える時間がぐっと減りました。娘に一人でテ
レビを見させて洗い物をするのも多くなり、後
ろめたい気持ちになります。

それでも、隙間時間を見つけては膝に娘を乗せ
て一緒に絵本を楽しむように心がけています。こ
の心がけをして気づきましたが、絵本は隙間時間
にはとても都合が良いのです。

絵本が隙間時間に都合のいい理由その一、時間
をコントロールできること。絵本は、読み方によ
って一つのお話を短くも、長くもできます。例え
ば、「しろぶたくん」がフルーツを次々に食べてキ
レイになっていく「なにをたべてきたの？」では、
お腹が食べたフルーツの色に染まることだけ楽し
む時間があります。「リンゴを食べたら赤です」と
私が言うと娘は「甘い」と、「レモンを食べたら黄

色です」と言うのと「すっぱい」などと元気よく応えていきます。あつという間に絵本を一巡しますが、テンポ良く楽しいひと時となります。一方で、じっくり文章を読んで、絵の細部を観察する時もあります。「しろぶたくん」が思わず石けんを食べた吐いた泡に、様々な色がにじんでいる様子をたつぷりと楽しみます。すると、お互いに気づかなかった色合いを発見することもあります。一つのお話を短くも長くもできるところは、動画やテレビにはない絵本の素晴らしさだと思います。

その二、濃密なコミュニケーションが図れること。娘と一緒に絵本を楽しむ時、私たちは絵本から情報を受け取るだけでなく、大いに自分を発信させます。「かわいいね」、「きれいだね」と絵をどのように認識したか伝え合い、怖い声、楽しい声

などで様々な感情を表現します。身振りや手振りを交えたり、短いメロディーをつけたりすることもあります。このように絵本を通して、お互いが今、何に興味があるのか、どんな風に感じているのかがわかります。「おじさんのかさ」を娘に読んだ時のことです。傘に雨が当たる音色を楽しげに表現している絵本で、傘が好きな娘はすぐに気に入って、「雨がふったらポンポロン」と調子のよいフレーズを繰り返して歌うようになりました。ところが娘はしだいに雨音より、「おじさん、おじさん」と絵の中のおじさんをうれしそうに指さすようになり、そのうち、娘はおじさんを「じーじ」と呼び、自らの祖父と重ねるほど親近感を持つようになり、娘の興味が変化していく様子を感じました。共に絵本を楽しむ時間は、絵本が感

性を共有する媒体となつて、例え短くても十分に
触れ合つた充足感を与えてくれると思います。

その三、非日常を身近に体験させてくれること。
日々の生活は仕事に家事、育児などが山積みです

が、絵本は慌ただしさを一旦横に置かなければ楽
しめません。「娘と絵本を楽しむ」という思いを動
機に、片づけたい諸々のことを振り払い、「はらぺ
こあおむし」を手に取つて開くと、そこには鮮や
かな色合いの美しい絵があります。文を声にだし
て読むと、そのリズムに懸念が晴れて心が軽くな
ります。膝の上に娘の温もりを感じ、ちようど顔
面にある娘の頭を思わず嗅ぐと、何とも言えない
頭皮の匂いが一気に時間をゆっくりにします。絵
本は、日常を切り離すために小説ほど集中力を要
しませんし、映画ほど時間を要しません。まさに

隙間時間に都合がよいのです。絵本は、忙しい母
親が子供ともつと関わりたいと思う時、隙間時間
にぴったり入り込んで手助けしてくれると確信し
ます。